2021年11月14日（日）

宣教 『苦難の中から』

テキスト：ヨナ書2章1～11節

ピノキオのお話をご存知でしょうか？操り人形で嘘をつくと鼻が伸びるなど子どもの好きな童話です。今日のヨナの物語と共通している点があります。

海の中で大きな魚に飲みこまれる場面です。実はピノキオの原作は、このヨナの物語ではないかとの説もあるぐらいなのです。

今日のヨナ書は、ヨナが海に投げ込まれ巨大な魚に飲み込まれ、最後は吐き出されるという筋です。

さて、ヨナはイスラエルの預言者で、1章ではヨナは神さまからイスラエルを滅ぼそうとしていた敵国アッシリアの首都ニネベに行き悔い改めの説教をするように命じられました。しかし、ヨナの狭い愛国心が神が異教徒に救いをもたらすことを許さず、ヨナは神の命令に背き舟で神さまから逃げようとします。その逃亡中の航海の途中、大嵐に遭い、ヨナの逃亡が船の乗組員たちにくじを引いて分かったのです。

ヨナの勧めで、彼は海に投げ込まれます。すると嵐は静まったのです。

このことが1章に記されていましたが、しかし神は決してヨナを見捨てることはされなかったのです。ヨナは大魚にのみ込まれますが、やがて海岸に吐き出され、ついにヨナは心を入れ替えて神さまの命令に従い、ニネベに宣教に出かけることになるのです。

◆ヨナの救助

1:さて、主は巨大な魚に命じて、ヨナを呑み込ませられた。ヨナは三日三晩魚の腹の中にいた。

ここで主とは、ヤハウエ、天と地を創られた方です。ヨナは海に投げ込まれ巨大な魚に飲み込まれたのです。巨大な魚は神さまが用意されていたのです。「ヨナは三日三晩魚の腹の中にいた。」とあります。

「三日三晩」とは決定的な事が起こる期間でもあります。私たちも何事につけ三日は忍耐したいものです。三日忍耐すれば、次の展開が待っていることがあります。イエスは十字架につけられ、よみにくだり、三日目によみがえりと使徒信条にはあります。

聖書では海は陰府（よみ）・死のイメージがあります。魚の腹の中は、母親の胎内をイメージさせます。すると、ヨナがこの海の中で三日三晩魚の腹の中にいた、ということはヨナの「死と再生」をイメージしたものだと言えるのです。

ヨナは死と隣り合わせの闇の中で神に守られていたのです。そして遂に再生して生きて行くのです。

この苦難の中でのヨナの祈りが2節から記されています。この祈りは、神によって救われた者が自分の受けた艱難、苦しみを振り返っているように思える祈りです。ヨナだけではなく私たちをも包み込む祈りであるように思えるのです。

2:ヨナは魚の腹の中から自分の神、主に祈りをささげて、

3:言った。苦難の中で、わたしが叫ぶと／主は答えてくださった。陰府の底から、助けを求めると／わたしの声を聞いてくださった。

ヨナの苦しみとひたむきな神への祈りです。ヨナは神さまによって再生させられるのです。苦難の中でのヨナの状況です。

4:あなたは、わたしを深い海に投げ込まれた。潮の流れがわたしを巻き込み／波また波がわたしの上を越えて行く。

5:わたしは思った／あなたの御前から追放されたのだと。生きて再び聖なる神殿を見ることがあろうかと。

6:大水がわたしを襲って喉に達する。深淵に呑み込まれ、水草が頭に絡みつく。

ヨナは苦しみのどん底に落ちたのです。イスラエルの人たちが大切にしていたエルサレムの神殿を、もうみることはあるまいとあきらめるしかない状態でした。「水草が頭に絡みつく。」という言葉が私は心に残りました。もう自分の力や努力ではどうすることもできない状況です。ただただ流されるだけ、人生にはこんな時もあると思います。しかし、ヨナはこのどん底の状態から救われたのです。

7:わたしは山々の基まで、地の底まで沈み／地はわたしの上に永久に扉を閉ざす。しかし、わが神、主よ／あなたは命を／滅びの穴から引き上げてくださった。

古代人は山の基は地の底にあると思っていたようで、これは今日、科学的にも間違いではないのかもしれませんが。「地はわたしの上に永久に扉を閉ざす。」ヨナは海の底に沈み、地は頭の上で扉を閉ざしているかのような状況です。閉じられた出口のない、光のない、死の状態と言えます。

ヨナの苦しみの状況です。ここでヨナは神に背いた己の罪に気づき、悔い、深く悔い改めたのです。ヨナは主なる神に祈ることは止めませんでした。神に祈ることは、信仰者に与えられた特権であり、最大の救いへの手段です。わたしたちも神さまに祈ることを止めてはならないのです。

あきらめず祈り続けること。いつも喜んでいなさい、絶えず祈りなさい。苦難の中で、イエス・キリストを伝える喜びの伝道に生きた伝道者パウロのことがばがあります。

また、ルカによる福音書に記された、主イエスのされた話で、裁判官に必死に救いを求めて、ついに助けられたやもめの話を思います。気を落とさずに耐えず祈ることを弟子たちに教えられたのです。

「8:息絶えようとするとき／わたしは主の御名を唱えた。」とは、「命がおとろえようとするとも、わが魂が弱っている時、主を思い出した。」とも訳されます。「主を思い出す」ことが何より重要なのです。初代の信仰者たちは、地上を生きられたイエスさま、十字架につかれたイエスさまを繰り返し思い出したのです。そこで「イエスは生きておられる。」という復活、再生の体験をして行ったのです。

わたしの祈り

があなたに届き／聖なる神殿に達した。

祈りは実現しないように見えても、必ず神さまに届いているのです。祈りにあきらめはないのです。忍耐して祈るのです。それで良いのです。

9節からは、新たにされたヨナの心のように、あらたなる生き方のように思えます。

9:偽りの神々に従う者たちが／忠節を捨て去ろうとも

10:わたしは感謝の声をあげ／いけにえをささげて、誓ったことを果た

そう。救いは、主にこそある。

「救いは主にこそある。」何と力強いことばでしょうか。神は自分を頼りにする者たちに最善を成してくださる憐み深い方なのです。神はイスラエルだけの神ではなく、全人類の神なのです。ヨナの心は主よって、狭い民族主義、自分の国や民族だけよければそれで良いという考えから、自由にされ解放されて行ったのです。

ヨナは救い出されるのです。ヨナを選ばれた神によって、ヨナは死と再生の体験をして、ここから再出発をするのです。

11:主が命じられると、魚はヨナを陸地に吐き出した。

心新たに生まれ変わったヨナは、今度こそは神の命令に従って、自分の意思でニネベの町へと向かったのです。ヨナをわたしたちは、自分たちに置き換えて良いのです。

神さまの憐みはわたしたち一人ひとりに注がれているのです。

グローリア、主をほめたたえよ！賛美しながら数々の困難のある人生の旅を主に希望を置いて、賛美しながら祈りつつ生きて行きたいと願います。

◆ヨナの救助

- 1:さて、主は巨大な魚に命じて、ヨナを呑み込ませられた。ヨナは三日三晩魚の腹の中にいた。
- 2:ヨナは魚の腹の中から自分の神、主に祈りをささげて、
- 3:言った。苦難の中で、わたしが叫ぶと／主は答えてくださった。陰府の底から、助けを求めると／わたしの声を聞いてくださった。
- 4:あなたは、わたしを深い海に投げ込まれた。潮の流れがわたしを巻き込み／波また波がわたしの上を越えて行く。
- 5:わたしは思った／あなたの御前から追放されたのだと。生きて再び聖なる神殿を見ることがあろうかと。
- 6:大水がわたしを襲って喉に達する。深淵に呑み込まれ、水草が頭に絡みつく。
- 7:わたしは山々の基まで、地の底まで沈み／地はわたしの上に永久に扉を閉ざす。しかし、わが神、主よ／あなたは命を／滅びの穴から引き上げてくださった。
- 8:息絶えようとするとき／わたしは主の御名を唱えた。わたしの祈りがあなたに届き／聖なる神殿に達した。
- 9:偽りの神々に従う者たちが／忠節を捨て去ろうとも
- 10:わたしは感謝の声をあげ／いけにえをささげて、誓ったことを果たそう。救いは、主にこそある。
- 11:主が命じられると、魚はヨナを陸地に吐き出した。